



Title	日系幼稚園における保護者と教師のデカセギ観
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	「調査と社会理論」・研究報告書, 24, 137-158
Issue Date	2007-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28294
Type	departmental bulletin paper
File Information	24_P137-158.pdf



日系幼稚園における保護者と教師のデカセギ観

品川ひろみ

第1章 園の概要と調査の日程

調査の対象であるA園はサンパウロ市内の日本人街にある私立の日系幼稚園である¹⁾。園児の多くは日系人であるが、非日系の園児も在籍している。本園は通常の就学前の児童だけではなく、小学校低学年の児童が放課後を過ごす、いわば学童保育の機能も合わせ持っている。そのため保育の他に、そろばん、水泳、太鼓、ピアノ、笛などのクラスがオプションとして用意されている。

保育の流れは、ブラジルの一般的な教育施設がそうであるように、基本的には午前クラス、午後クラスに分かれているが、希望によっては午前・午後通しての全日の保育も可能となっている。

1ヶ月の学費は、全日保育の場合は180ドル程度であり、半日では100ドル程度である。オプションの習い事をする場合は、それぞれ加算される。この学費はサンパウロの日系ブラジル人学校の中では比較的安いほうであるといわれている。

調査は2006年8月16日～23日に行われた。日本で用意したポルトガル語版の調査票を、児童を通じて家庭に配布し、記入後、幼稚園に持参してもらう方法を取った。配布数は保護者95票、小学校高学年以上の児童5票、教師13票であった(表1)。回収数は保護者49名、教師10票、児童2名であった²⁾。

表1 配布数と回収率

	配布数	回収数	回収率
保護者	95	49	51.6
高学年児童	5	2	40.0
教師	13	10	76.9

第2章 日系幼稚園に在籍している保護者のデカセギ意識

第1節 児童と保護者の生活背景

この調査に答えてくれた者は、父親が28.6%、母親が69.4%、祖父2%であった(表2)。家族数は、3人家族(32.7%)、4人家族(22.4%)が多く、5人家族も2割近い(18.4%)(表3)。回答者は1名を除き全て日系人であり、日系2世が49.0%、日系3世が42.9%とほぼ同数であった³⁾(表3)。

子どもである児童の年齢を見ると、就学前の6歳以下が全体の7割近くとなっている。その内訳は3歳3名、4歳13名、5歳12名、6歳5名である。また7歳～14歳までの学齢期の児童が13名、15歳以上の児童も2名が通園している(表5)。性別では男児23名、女児が22名とほぼ半数ずつで

ある（表6）。児童のきょうだい数を見ると、きょうだいがいない、つまり「一人っ子」は18名、「2人きょうだい」が18名、「3人きょうだい」が8名、「4人きょうだい」が2名となっており、7割以上が2人以下のきょうだい数となっている（表7）。また調査票を持ち帰った児童が「第1子」であると答えた者は、6割程度（63%）、「第2子」が3割ほど（28.3%）であった（表8）。

表2 回答者

	度数	パーセント
父親	14	28.6
母親	34	69.4
祖父	1	2.0
合計	49	100.0

表3 家族人数

	度数	パーセント
1人	0	0.0
2人	2	4.1
3人	16	32.7
4人	11	22.4
5人	9	18.4
6人	4	8.2
7人	1	2.0
未回答	6	12.2
合計	49	100.0

表4 日系

	度数	パーセント
日系1世	0	0.0
日系2世	24	49.0
日系3世	21	42.9
その他	3	6.1
日系人ではない	1	2.0
合計	49	100.0

表5 子どもの年齢

	度数	パーセント
3歳	3	6.3
4歳	13	27.1
5歳	12	25.0
6歳	5	10.4
7歳～14歳	13	27.1
15歳以上	2	4.2
合計	48	100.0

表6 子どもの性別

	度数	パーセント
男児	23	51.1
女児	22	48.9
回答無	3	—
合計	48	100.0

表7 きょうだい数

きょうだい	度数	パーセント
なし	18	39.1
2人	18	39.1
3人	8	17.4
4人	2	4.3
5人以上	0	0.0
不明・回答無	2	—
合計	48	100.0

表8 きょうだいの何番目か

	度数	パーセント
第1子	29	63.0
第2子	13	28.3
第3子	3	6.5
第4子	1	2.2
第5子	0	0.0
不明・回答無	3	—
合計	49	100.0

保護者の職業を見ると、販売職（30.6%）、事務職（16.3%）、サービス職（14.3%）、専門・技術職（14.3%）などが多く見られる（表9）。自営業主や家族従業者が多く、雇用されている場合も正社員が多い（表10）。そのためか、家族の月収は「1000リアル以下」は少なく、「1000～3000リアル未満」が41.9%と最も多い。「3000～5000リアル未満」は18.6%、「5000～7500リアル未満」は20.9%であり、7500リアル以上は合わせて1割程度であった（表11）。

先に保護者のほとんどは日系人であることを確認したが、日本語の能力はどの程度なのだろうか。日本語能力の中でも「話す」「聞く」「読む」「書く」について聞いたところ、保護者の日本語能力にはかなりの差が見られた（表12）。話をするに関しては、「流暢に話せる」が28.3%、「かなり話せる」が17.4%と半数弱の者が日本語で話すことが問題なくできるが、半数以上の者は「簡単な内容なら話せる」（39.1%）、「ほとんど話せない」（15.2%）という程度である。聞き取ることにしてもそれと同傾向である。「ニュースがわかる」は22.2%、「日常生活の話題がわかる」が24.4%であり、やはり半数程度の保護者は日本語の聞きとり能力が高いといえる。だが一方で「基本的なことならわかる」36.6%、「ほとんどわからない」17.1%と日本語を聞きとることがあまりできない保護者も存在している。さらに読むことや書くことに関しては、話をする、聞くということ以上に難しい。読むことでは「新聞が読める」者は1割程度しか見られず（10.3%）、「簡単な雑誌が読める」も3割程度である（33.3%）。「簡単な内容なら読める」者は2割程度であり（20.5%）、「ほとんど読めない」とする者も3割以上存在する（35.9%）。書くことに関しては「どんな文章でも書ける」ものは少なく（4.9%）、「簡単なメモが書ける」者が半数程度である（53.7%）。多くが「文字がいくつか書ける」程度（22.0%）であり、「何も書けない」も2割程度（19.5%）見られるなど、同じ日系人であっても日本語の能力には差があることがわかる。

表9 保護者職業

	度数	パーセント
事務職	8	16.3
保安職	0	0.0
販売職	15	30.6
生産	2	4.1
運輸・通信	1	2.0
専門・技術	7	14.3
管理的職業	5	10.2
農林漁業	0	0.0
サービス職	7	14.3
学生	0	0.0
無職	0	0.0
その他	9	18.4

表10 従業上の地位

	度数	パーセント
経営者・役員	1	2.0
正社員	11	22.4
パート・アルバイト	1	2.0
自営業主	11	22.4
家族従業者	6	12.2
その他	4	8.2
未回答	15	30.6

表11 世帯年収

	度数	パーセント
1000リアル以下	4	9.3
1000～3000リアル未満	18	41.9
3000～5000リアル未満	8	18.6
5000～7500リアル未満	9	20.9
7500～10000リアル未満	1	2.3
10000～12500リアル未満	2	4.7
12500～15000リアル未満	0	0.0
15000リアル以上	1	2.3

表12 保護者の日本語能力

	とても出来る	だいたい出来る	多少できる	ほとんど出来ない
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
日本語能力 話すこと	13(28.3)	8(17.4)	18(39.1)	7(15.2)
日本語能力 読むこと	4(10.3)	13(33.3)	8(20.5)	14(35.9)
日本語能力 聞き取ること	9(22.0)	10(24.4)	15(36.6)	7(17.1)
日本語能力 書くこと	2(4.9)	22(53.7)	9(22.0)	8(19.5)

第2節 日系幼稚園の特徴と入園の理由

保護者たちが、子どもを本園に入れたのはどのような理由からだろうか（表13）。多く選択されている項目を見ると、「家が近いから」55.1%、「しつけをきちんとしてくれるから」53.1%、「学習レベルが合っているから」53.1%などであった。他には、「日系人が多く通っているから」40.8%、「日本のことを教えてくれるから」40.8%などが多く選択されている。家が近いというのは別として、やはり「日系の幼稚園」であることを意識した内容を期待していると見ることができる。特に「しつけ」については、ブラジルでは日系人は教育熱心であり、子どもに対するしつけもしっかりしていると考えられている。この園においても、例外ではないことが確認された結果であった。

では日系人学校一般に対してはどの様に捉えているのだろうか（表14）。日系人学校の特色と考えられる項目について5つの尺度で聞いた際、「そう思う」と答えた部分に着目すると、「基本的な礼儀が身につく」58.7%、「日本の文化を身に付けられる」40.0%、「日本語を身につけられる」39.1%、「学力レベルが高いところが多い」25.0%など、本園に子どもを入れた理由と重なる部分も多い。「学力レベルが高いところが多い」に関しては、サンパウロにおける日系人学校の中には、いわゆる有名大学への進学率が高い高校も多いといわれており、それを裏付けている。

このように保護者たちは自らが日系人であること、子どもに対しても日本文化を取り入れた保育環境を期待して本園を選択しているといえよう。

表13 園を選んだ理由（複数回答）

	度数	パーセント
学習レベルが合っているから	26	53.1
進学するのに有利だから	16	32.7
就職するのに有利だから	1	2.0
日系人が多く通っているから	20	40.8
子どもの友達に通っているから	13	26.5
子どもが行きたがったから	8	16.3
しつづけをきちんとしてくれるから	26	53.1
日本のことを教えてくれるから	20	40.8
家から近いから	27	55.1
他にいい学校がないから	4	8.2
その他	6	12.2
特に理由はない	1	2.0

表14 日系人学校の特徴

	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
	そう思う	だいたい思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない
日本語を身につけられる	18(39.1)	17(37.0)	8(17.4)	2(4.3)	1(2.2)
日本語で学ぶので日系人には理解しやすい	8(18.2)	9(20.5)	17(38.6)	6(13.6)	4(9.1)
日本の文化を身につけられる	18(40.0)	16(35.6)	9(20.0)	1(2.2)	1(2.2)
学力レベルが高いところが多い	11(25.0)	10(22.7)	12(27.3)	4(9.1)	7(15.9)
将来の就職に有利	8(18.2)	6(13.6)	11(25.0)	9(20.5)	10(22.7)
基本的な礼儀が身につく	27(58.7)	11(23.9)	7(15.2)	0(0.0)	1(2.2)

第3節 デカセギ経験

次に保護者自身のデカセギに関して尋ねてみた。はじめに、保護者のデカセギの経験について聞いてみたところ、日本へのデカセギ経験がある者は15名と、全体の3割程度がデカセギ経験を持っていた（表15）。その際に家族を伴っていたかどうかについては、3名のみが「家族全員で行った」と答えており、多くが「家族の一部が残った」と答えている（10名）（表16）。また、その際の子どもの状況であるが、「日本に連れて行った」ものは1名のみで、「ブラジルに残した」と答えたものはない。また注目すべきは、「子どもがまだ生まれていない」10名、「日本で生まれた」者が5名存在することである（表17）。このことから、日本へデカセギに行く時点では独身か、まだ子どものいない状況の場合が多いといえる。

表15 保護者のデカセギ経験

	度数	パーセント
ある	15	30.0
ない	31	62.0
未記入	4	8.0
合計	50	100.0

表16 家族の状況

	度数	パーセント
家族全員で行った	3	20.0
家族の一部が残った	10	66.7
未回答	2	13.3
合計	15	100.0

表17 子どもの状況

	度数	パーセント
一緒に連れて行った	1	6.7
ブラジルに残した	0	0.0
日本で生まれた	5	33.3
まだ生まれていない	10	66.7

このように、本園においては3分の1程度の保護者が実際に日本へのデカセギを経験している。さらに、それ以外の者も、自分自身の経験は持たないものの、家族がデカセギに行ったことがある者が22名と7割近い(表18)。その内訳をみると、「きょうだい」が12名と最も多く、次いで「その他」の10名、「母親」5名、「父親」3名、「配偶者」1名となっている(表19)。子どもの祖父母や叔父、叔母がデカセギに行く例が多く見られるなど、日本へのデカセギは、珍しくないといえよう。

それでは実際に日本にデカセギに行く場合、どのようなルートで行くことになったのだろうか(表20)。日本へのデカセギの経緯について聞いたところ、「仲介業者を通じて」と答えたものが7名と最も多い。また、「先に行った家族を通じて」と答えた者も見られるが(3名)、「企業を通じて」という、経緯は確認できなかった。やはりサンパウロの日系人全般に見られるように、仲介業者を通してデカセギに行く例が多いことがわかる。

表18 家族のデカセギ経験

	度数	パーセント
いる	22	68.8
いない	10	31.3
合計	32	100.0

表19 デカセギにいった方(複数回答)

	度数	パーセント
配偶者	1	4.5
父親	3	13.6
母親	5	22.7
きょうだい	12	54.5
子ども	0	0.0
その他	10	45.5

表20 デカセギの経緯

	度数	パーセント
仲介業者を通じて	7	46.7
先に行った家族を通じ	3	20.0
友人を通じて	0	0.0
日本企業を通じて	0	0.0
その他	5	33.3

第4節 デカセギの状況

デカセギの経験を持つ保護者に、日本へデカセギに行った理由について確認してみたところ、「ブラジルの経済が不安定だから」66.7%、「日本の企業に関心があったから」60.0%、「ブラジルの政情が不安定だったから」53.3%と、ブラジル本国での政治や経済の不安定さと、日本への関心という大きく2つの理由に基づいていることがわかる(表21)。

そのような彼らが実際日本ではどのような仕事に就いていたのだろうか(表22)。日本での仕事を見ると「電気や自動車関連」が最も多く、9割近い(86.7%)。他には「食品の製造加工」26.7%、「事務」20.0%、「建設・土木」13.3%などであった。はじめに見たように、彼らの現在の職業は事務や販売などいわゆるホワイトカラーであるが、日本ではほとんどの者がブルーカラーの仕事に就いていたといえる。

表21 デカセギの理由（複数回答）

	度数	パーセント
ブラジルの経済が不安定だから	10	66.7
ブラジルの政情が不安定だったから	8	53.3
ブラジルで起業する資金がほしかったから	3	20.0
日本の企業に関心があったから	9	60.0
家族・親戚が行っていたから	4	26.7
デカセギで成功した人の話を聞いたから	0	0.0
その他	6	40.0
特に理由はない	0	0.0

表22 日本での仕事（複数回答）

	度数	パーセント
電気や自動車関連	13	86.7
食品の製造加工	4	26.7
繊維や衣料品	0	0.0
建設・土木工事の仕事	2	13.3
販売店での販売の仕事	1	6.7
飲食店等での調理師の仕事	0	0.0
飲食店等でウェイター、皿洗いなどの仕事	0	0.0
ホテル、ビル、工場などでの清掃の仕事	0	0.0
事務員の仕事	3	20.0
エンジニアの仕事	0	0.0
その他	2	13.3

それでは日本ではどのような生活だったのだろうか。日本での生活で困難だったことを聞いてみた（表23）。最も多かったのは「日本語がわからなかった」である（40.0%）。この調査の対象者は多くが「日系2世」「日系3世」であり、日常の使用言語はポルトガル語が中心である。先にも見たように日本語が堪能なのは半数程度であり、特に書く・読むについては難しい状況であった。次いで、「日本の食事が口に合わなかった」「帰国の目処が立たなかった」がともに2割程度（26.7%）見られる。また、「外国人であることに差別を受けた」も僅かだが存在している（6.7%）。子どもに関する問題で困難とする者は、子どもがまだいなかった者が多いためか、見られなかった。

それでは、それらの困難な問題に対してどの様に対処していたのだろうか（表24）。「自分で解決した」と「日系ブラジル人の知り合いに相談した」という者が最も多い（ともに46.7%）。他には「デカセギの仲介業者に相談した」（26.7%）、「日本の知り合いに相談した」（26.7%）などが多く、「ブラジルの家族・親戚に相談した」とする者は見られなかった。そのためか、ブラジル本国の家族との連絡の頻度はそう多くはない。「月に1度」（11名）程度連絡をとっていた者が多く、「ほとんどとっていない」と答えた者も同程度存在する（10名）。「毎日」あるいは「毎週」連絡を取っている者はいなかった（表25）。また、その際の連絡方法を見ると、「手紙を書く」という方法は少なく（2名）、多くが「メール」（4名）、「電話」（3名）、「贈り物」（3名）である（表26）。また、ブラジルの家族へ仕送りしていたと答えたものも確認できなかった（10名、無回答が12名）（表26）。

帰国した理由を見ると、「家族と一緒に暮らしたかったから」20.0%、「お金が貯まったから」13.3%が目立つ程度で、特に集中した傾向は見られなかった（表27）。最も多かったのは「その他」60.0%であり、それぞれ多様な理由を持ち帰国したといえる。

表23 日本の生活で困難だったこと（複数回答）

	度数	パーセント
日本語がわからなかった	6	40.0
知り合いができなかった	0	0.0
仕事が見つからなかった	0	0.0
外国人であることを理由に差別を受けた	1	6.7
お金がなかった	0	0.0
子どもが学校の勉強についていけなかった	0	0.0
子どもがいじめられた	0	0.0
子どもに友達ができなかった	0	0.0
日本の食事が口に合わなかった	4	26.7
自分が何人であるのかわからなくなった	0	0.0
家族との連絡がつかなかった	0	0.0
帰国の目処がなかなか立たなかった	4	26.7
その他	1	6.7
特にない	7	46.7

表24 解決の理由（複数回答）

	度数	パーセント
家族に相談した	3	20.0
ブラジルの家族・親戚に相談した	0	0.0
日本の知り合いに相談した	4	26.7
日系ブラジル人の知り合いに相談した	7	46.7
ブラジル以外の外国人の知り合いに相談した	2	13.3
雇用主に相談した	3	20.0
学校の先生に相談した	2	13.3
デカセギの仲介業者に相談した	4	26.7
自分で解決した	7	46.7
その他	0	0.0
特に何もしなかった	1	6.7

表25 連絡の頻度

	度数	パーセント
毎日	0	0.0
週に1度程度	0	0.0
月に1度程度	11	52.4
ほとんどとっていない	10	47.6

表26 連絡の方法と仕送りの状況（複数回答）

	度数	パーセント
手紙を書いた	2	13.3
電話をした	3	20.0
メールをした	4	26.7
贈り物をした	3	20.0
観光に呼んだ	0	0.0
その他	0	0.0
特に何もしない	1	6.7
仕送りをした	0	0.0
仕送りをしなかった	10	47.6

表27 帰国の理由

	度数	パーセント
ブラジルの経済が安定したから	1	6.7
ブラジルの治安が安定したから	1	6.7
お金が貯まったから	2	13.3
高齢になったから	0	0.0
仕事がなくなったから	1	6.7
日本の経済が不安定になったから	1	6.7
日本に住みにくくなったから	0	0.0
お金がなくなったから	0	0.0
家族と一緒に暮らしたかったから	3	20.0
予定していた帰国時期になったので	0	0.0
その他	9	60.0
特に理由はない	0	0.0

帰国している現在、また日本にデカセギに行きたいかという間については、「できれば行きたくない」40.0%、「絶対に行きたくない」13.3%、と日本へのデカセギに消極的な者が多い（表28）。その理由を見ると、「ブラジルで成功したから」（行きたくない）40.0%、「家族が日本にいるから」（行きたい）13.3%という理由が多く、「日本で嫌な思いをしたから」（行きたくない）と答えた者はいなかった（表29）。

一方で「予定はないが行きたい」とする者が3割程度みられる（33.3%）（表28）。その理由を見ると、「日本が生活しやすかった」20.0%、「デカセギで稼いだお金がなくなった」13.3%、「ブラジルの経済が不安定だから」13.3%、「ブラジルの政情が不安定だから」13.3%、「元々一時的な帰国だから」13.3%など、当初のデカセギの理由と同様な傾向であった（表29）。

表28 日本へのデカセギ希望

	度数	パーセント
行く予定が立っている	0	0.0
予定はないが行きたい	5	33.3
できれば行きたくない	6	40.0
絶対に行きたくない	2	13.3
未回答	2	13.3

表29 その理由

	度数	パーセント
デカセギで稼いだお金がなくなったから	2	13.3
ブラジルの経済が不安定だから	2	13.3
ブラジルの政情が不安定だから	2	13.3
日本が生活しやすかったから	3	20.0
元々一時的な帰国だから	2	13.3
家族が日本にいるから	2	13.3
ブラジルで成功したから	6	40.0
日本で嫌な思いをしたから	0	0.0
日本に行っても豊かになれないから	0	0.0
ブラジルに家族がいるから	5	33.3
その他	4	26.7
特に理由はない	0	0.0

第5節 デカセギの意識

最後に日本へのデカセギ全般に対する意識について聞いたところ「どんどん行くべき」と答えた者は2割程度であり（20.4%）、多くは「仕方がない」（65.3%）と考えている。「あまり好ましくない」（12.2%）、「行くべきでない」（2.0%）と否定的なものは少数であった（表30）。その理由としては「生活のためには仕方がないから」（44.9%）が最も多いが、「日本の文化を知ることができるから」（42.9%）とプラスに捉えている見方も存在する。一方で日本へのデカセギに否定的なものは2割に満たなかったが、「子どもの教育に影響がある」（40.8%）と日本へのデカセギについて心配する者が4割程度見られた。これは、生活のためには仕方がないが、子どもへの影響が心配だと考えているということであろう。

また、日本へデカセギに行くことで、「ブラジルの経済が活性化する」「ブラジルの社会が活性化する」と考える者は少数であり（共に8.2%）、「ブラジルの経済が停滞する」（4.1%）「ブラジルの社会から活気がなくなる」（0%）とはほとんど考えていない（表31）。

表30 デカセギに対する意識

	度数	パーセント
どんどん行くべき	10	20.4
仕方がない	32	65.3
余り好ましくない	6	12.2
行くべきでない	1	2.0
合計	49	100.0

表31 その理由

	度数	パーセント
ブラジルの経済が活性化するから	4	8.2
ブラジルの社会が活性化するから	4	8.2
生活のためには仕方がないから	22	44.9
日系人が祖国へ行くのは当然だから	14	28.6
日本の文化を知ることができるから	21	42.9
ブラジル人はブラジルで仕事をすべきだから	3	6.1
ブラジルの経済が停滞するから	2	4.1
ブラジルの社会から活気がなくなるから	0	0.0
子どもの教育に影響があるから	20	40.8
その他	5	10.2
特に理由はない	1	2.0

では子どもに関してはどの様に考えているのだろうか（表32）。デカセギについて「行くべきでない」（14.3%）と考える者も見られるが、多くは「家族一緒ならよい」（79.6%）と考えている。また、「親だけが単身で行くべき」と考える者もごく少数である（6.1%）。それを裏付けるように家族同伴のデカセギは、子どもに対して「よい影響」を与えると答えた者は2割程度も見られ（20.4%）、「多少よい影響」を与える（59.2%）を合わせると8割近くが家族一緒のデカセギを肯定的に捉えており、「どちらかという悪い」と考える者は2割程度に留まっている（20.4%）（表33）。

そこでその理由を見てみると、プラス面としての、「国際的な視野が広がる」55.1%が多く選択されている。しかし一方では「ポルトガルを覚えられない」32.7%、「遊びが日本的になる」38.8%、「ブラジルの歴史を覚えられない」24.5%と日本での生活によって子どもの将来に不安を抱いている者も見られる（表34）。そこで、この点についてさらに詳しく見てみよう。

表32 子どもがいる場合のデカセギ形態

	度数	パーセント
家族一緒ならよい	39	79.6
親だけが単身で	3	6.1
行くべきでない	7	14.3
合計	49	100.0

表33 デカセギが子どもに与える影響

	度数	パーセント
よい影響	10	20.4
多少よい影響	29	59.2
どちらか悪い	10	20.4
合計	49	100.0

表34 その理由（複数回答）

	度数	パーセント
ポルトガル語を覚えられない	16	32.7
ブラジルの歴史を覚えられない	12	24.5
食生活日本的になる	14	28.6
遊び日本的になる	19	38.8
礼儀が身につけられない	5	10.2
国際的な視野広がる	27	55.1
その他	15	30.6

家族を伴って日本へデカセギに行くことについて、いくつかの選択肢を用意し、「そう思う」から「全く思わない」まで5つの尺度で聞いてみた（表35）。その中で「そう思う」「だいたいそう思う」という肯定的な考えが多かった項目を見ると、「日系人にとって日本を知るよい機会だ」（74.6%）、「日本は治安がよいので子連れでも安心だ」（73.9%）、「日本語を身につけられてよい」（67.4%）などが多く選択されている。先に日本にデカセギに行く目的として、ブラジルの経済や政情の不安定さと日本への関心の2つがあったが、やはりこの2つに属するといつてよいだろう。日本は治安がよいので子連れでも安心とする考えについては、ブラジルにおける治安の状況と対比させているものと考えられる。また日本で生活することで心配な点として、「将来ブラジルでの就職が不利になる」（54.3%）、「ブラジルに帰国したときに難しいと思う」（42.6%）、「子どものアイデンティティが確立しないと思う」（42.6%）などがあった。将来ブラジルでの就職が不利になることについては、ブラジルの学校教育を受けられないこと、あるいは途中で受けることが、将来の就職にマイナスだと考えていると推察される。ちなみに、保護者たちの子どもへの学歴期待は、ほとんどが大学以上で、大学院も7割近い（表36）。その際はブラジルで教育を受けてほしいと考える者が7割を超える（表37）。

また、「将来ブラジルでの生活が不利になる」という項目は28.9%しか選択されておらず、生活のすべてが不利になるという意味ではないことがわかる。しかし、この項目については、「思わない」「全く思わない」とする者が合わせて31.1%、「どちらとも言えない」とする者が40.0%と、非常に考えが分かれる項目である。これと同様な傾向の項目として「家族が離れて生活するよりよい」という項目がある。こちらは「そう思う」「だいたいそう思う」と肯定的な考えの者は合わせて21.7%、「あまり思わない」「全く思わない」と否定的な考えの者は、合わせて39.1%と、否定的な意見が多いようにも見えるが、「どちらとも言えない」も39.1%と同程度選択されており、意見が分かれる。さらに、「日本にいても母国の教育を心がければ問題ない」という項目については、肯定的な者が合わせて37.2%、否定的な者が合わせて37.2%、「どちらとも言えない」者が25.6%とやはり意見が分かれる結果であった。

表35 デカセギに対する考え

	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
	そう思う	だいたい思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない
子どもの年齢が低ければ影響は少ない	7(15.2)	2(4.3)	10(21.7)	9(19.6)	17(37.0)
日系人にとって日本を知るよい機会だ	28(59.6)	7(14.9)	9(19.1)	1(2.1)	2(4.3)
日本語を身につけられてよい	23(50.0)	8(17.4)	12(26.1)	2(4.3)	1(2.2)
日本は治安がよいので子連れでも安心だ	24(52.2)	10(21.7)	4(8.7)	1(2.2)	6(13.0)
家族が離れて生活するよりはいい	6(13.0)	4(8.7)	18(39.1)	8(17.4)	10(21.7)
将来ブラジルでの生活が不利になる	8(17.8)	5(11.1)	18(40.0)	8(17.8)	6(13.3)
将来ブラジルでの就職が不利になる	7(15.2)	18(39.1)	10(21.7)	6(13.0)	5(10.9)
ブラジルに帰国したときに難しいと思う	10(21.3)	10(21.3)	16(34.0)	6(12.8)	5(10.6)
子どものアイデンティティが確立しないと思う	10(21.3)	10(21.3)	16(34.0)	6(12.8)	5(10.6)
日本にいても母国の教育を心がければ問題ない	8(18.6)	8(18.6)	11(25.6)	8(18.6)	8(18.6)

表36 子どもへの学歴期待

	度数	パーセント
中学校	0	0.0
高校	0	0.0
専門学校	0	0.0
短大	0	0.0
大学	15	30.0
大学院	34	68.0
その他	1	2.0
合計	50	100.0

表37 どの国の学校か

	度数	パーセント
ブラジル	36	72.0
日本	11	22.0
アメリカ	11	22.0
その他	3	6.0

このように保護者の日本へのデカセギ意識は、子どもへの影響を危惧しながらも、「生活のためには仕方がない」と考え、その不安を「子どものためにもよい」と捉えることで、支えているようにも捉えられる。

それでは次に、教師たちはどの様に考えているのかを見ていこう。

第3章 デカセギ帰国児童とその保護者に対するスタッフの意識

第1節 スタッフの背景

アンケートに答えてくれた教員は10名、女性が9名、男性が1名である。年齢は24歳～64歳であるが、20代、30代の教師はそれぞれ1名ずつしかいないため、平均すると47.3歳となっている。幼稚園における担当は、およそ半数が保育であるが、音楽や日本語の教師も含まれている。彼らの出身地は、1名を除きサンパウロおよびサンパウロ郊外で生まれており、一人の日系3世以外は日系2世であり、職員のすべてが日系人である。学歴についても、ほとんどが大学卒業である⁴⁾(表38)。

教員としての経験をみると1人以外は10年以上の経験を持ち20年以上や30年以上の経験を持つ教師も見られるなど、ベテランが多い(表39)。本園に勤務した理由を尋ねると、「教育に携わりたかった」(7名)が最も多く、他には「教育方針が気に入ったから」(4名)、「日系の幼稚園だから」(3名)という理由が見られた(表40)。やはり、教育職に就きたいとの希望が根底にあり、その上で「日系の幼稚園」、日本的な保育を意識した「教育方針」が条件となり、本園に勤めることを希望したと見ることができる。

そのような彼らの、日本との繋がりほどの程度なのだろうか(表38)。これまでの日本への来日経験や滞在経験を聞いたところ、日本に住んでいた経験を持つ者が3名、日本への来日経験を持つ者が4名、来日経験が全くない者が3名であった。滞在経験を持つ3名は、「日本語」や「音楽」を担当している。特に「音楽」を担当している教員は、本園の卒園児であり、大学卒業後日本の専門学校で保育を学び、帰国したという。他の2名も15歳～29歳まで14年間も日本で生活していた者や、3年程滞在し、来日の経験も多く持っている。一方で来日の経験を持つものは1回～3回程度と様々である(表38)。そのため、日本語の能力も違いが見られる(表41)。日本語能力の中でも、

「会話」「読む」「聞く」「書く」について聞いたところ、会話についてはほとんどが「流暢に話せる」「かなり話せる」であるが、読む、聞く、書くについては、新聞が読める、ニュースがわかる、どんな文章でも書ける程度はそれぞれ2名しかいない。日常生活の話題がわかる程度の者や簡単なメモが書ける者は6名前後見られるが、読むことに関しては、簡単な雑誌が読めるものは3名と少なく、読む、書くについてはレベルが異なっていることがわかる。

表38 対象者の基本属性

	性別	年齢	日系	専門	学歴	滞在・来日経験	期間・回数	出身地
1	女性	24	3世	音楽	大学	滞在経験あり	22歳～23歳	サンパウロ近郊
2	女性	34	2世	日本語	大学	滞在経験あり	15歳～29歳	サンパウロ市内
3	男性	53	2世	日本語	大学	滞在経験あり	40歳～43歳	ブラジル日本以外
4	女性	47	3世	—	大学	経験なし	—	サンパウロ市内
5	女性	54	2世	—	—	来日経験あり	1回程度	サンパウロ近郊
6	女性	40	2世	—	短大	来日経験あり	1回程度	サンパウロ近郊
7	女性	46	2世	—	高校	来日経験あり	2回程度	サンパウロ近郊
8	女性	58	2世	—	大学	来日経験あり	3回程度	サンパウロ近郊
9	女性	53	2世	—	大学	経験なし	—	サンパウロ市内
10	女性	64	2世	—	大学	経験なし	—	サンパウロ市内

表39 教員経験

	教師になった年	通算年
1	2004	1
2	—	13
3	1994	11
4	1985	21
5	1990	16
6	1988	18
7	1977	36
8	1972	34
9	1990	16
10	—	10

表40 勤務の理由

	度数	パーセント
教育に携わりたかった	7	38.9
これまでの経験が活かせる仕事	2	11.1
人にすすめられて	0	0.0
日系の幼稚園だから	3	16.7
勤務条件がよかったから	2	11.1
教育方針が気に入ったから	4	22.2
その他	0	0.0

表41 日本語能力

	とても出来る	だいたい出来る	多少できる	ほとんど出来ない
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
話をする事	4(44.4)	4(44.4)	1(11.1)	0(0)
読む事	2(22.2)	3(33.3)	4(44.4)	0(0)
聞き取る事	2(22.2)	6(66.7)	1(11.1)	0(0)
書く事	2(25.0)	5(62.5)	1(12.5)	0(0)

はじめにも述べたように本園は、サンパウロ市内にある日系の幼稚園である。今回の調査は日系人が対象であるが、入園している子どもの中には、日系人ではない子どももいる。またサンパウロ市内には非日系の幼稚園も多数存在する。そのような中で、子どもを入園させる保護者は、選択的にこの園を選んでいるといえる。また教師たちも先に見たように選択的にこの園に勤めているといえる。では教師たちは、いわゆる日系の学校全般の特徴をどのように捉えているのだろうか。いくつかの選択肢を用意して、「そう思う」から「全く思わない」まで5つの尺度で聞いてみた(表42)。

その結果、肯定的に捉えられている考えとしては、「日本文化を身につけられる」(87.5%)、「日本語を身につけられる」(62.5%)、「基本的な礼儀が身につけられる」(85.8%)などであり、それと比べると「日本語で学ぶので日本人には理解しやすい」、「学力レベルが高いところが多い」、「将来の就職に有利」などはあまり多くは選択されていない。つまり日系の学校の特徴は日本の文化そのものや、文化に基づく言語や行動様式(礼儀)が身につけられると、教師自身が捉えていることがわかる。

表42 日系人学校の特徴

	そう思う	だいたい思う	どちらとも言えない	あまり思わない	全く思わない
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
日本語を身につけられる	3(37.5)	2(25.0)	3(37.5)	0(0.0)	0(0.0)
日本語で学ぶので日系人には理解しやすい	1(14.3)	1(14.3)	4(57.1)	0(0.0)	1(14.3)
日本の文化を身につけられる	4(50.0)	3(37.5)	1(12.5)	0(0.0)	0(0.0)
学力レベルが高いところが多い	1(14.3)	3(42.9)	3(42.9)	0(0.0)	0(0.0)
将来の就職に有利	1(14.3)	2(28.6)	2(28.6)	2(28.6)	0(0.0)
基本的な礼儀が身につく	3(42.9)	3(42.9)	1(14.3)	0(0.0)	0(0.0)

では本園ではどのようなことが重視されているのだろうか(表43)。「とても重要」「やや重要」と答えた者が多い項目を見てみると、「教師のレベルがよいこと」(100%)、「教育の内容がよいこと」(100%)、「施設の設備がよいこと」(100%)、「基本的な生活習慣を身につけさせる」(85.8%)、「礼儀や挨拶などのマナー」(71.5%)、「さまざまな経験をさせる」(71.5%)などであり、「のびのびと自由な教育」や「レベルの高い大学への進学」などは、本園が幼稚園であることもあってか、あまり重視されていない。

また、保育内容について聞いたところ、保育の中に日本文化を取り入れることは、ほとんどが「よくある」「時々ある」と答えているように、取り入れていない者はいなかった(表44)。その内容を自由記述から見てみると、七夕、ひな祭り、お正月などの季節の行事や折り紙などの内容が多い。

このようにほとんどの教師が保育に日本の文化を取り入れ、伝えることが「必要だ」と思っており(表45)、その理由として「日本文化のよさがあるから」(40.0%)、「国際理解のため」「ここが日系人学校だから」(ともに26.7%)と考えている(表46)。

では、ブラジルの文化を伝えることについては、どのように考えているのだろうか(表47)。ブラジルの文化を伝えることは「あまり必要ない」と考える者が一人だけで、それ以外は必要だと感じている。ただしその理由を見ると、「家庭だけでは身につかないこともある」と考えるものは少数で(16.7%)、「自国の文化を知ることは大切だから」とする者もそれほど多くはない(25.0%)。最も多いのは「自国の文化にとらわれないほうがよい」とする者である(58.3%)(表48)。つまり、ブラジルの文化を伝えることは大切であるが、それに固執せずに日本の文化も取り入れることが肝要と言うことである。それは自らが日系人でありながら、現在も日本の文化を取り入れた幼稚園に勤務していることが影響した結果といえよう。

表43 学校（園）において重視されること

	とても重要	まあ重要	どちらとも 言えない	あまり重要 でない	全く重要で ない
	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
教育の内容がよいこと	2(28.6)	5(71.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
教師のレベルがよいこと	6(75.0)	2(25.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
施設の設備がよいこと	3(42.9)	4(57.1)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
基本的な生活習慣を身につけさせる	3(42.9)	3(42.9)	1(14.3)	0(0.0)	0(0.0)
のびのびと自由な教育	2(33.3)	0(0.0)	4(66.7)	0(0.0)	0(0.0)
礼儀や挨拶などのマナー	3(42.9)	2(28.6)	1(14.3)	1(14.3)	0(0.0)
さまざまな経験をさせる	2(28.6)	3(42.9)	2(28.6)	0(0.0)	0(0.0)
レベルの高い大学への進学	2(28.6)	1(14.3)	4(57.1)	0(0.0)	0(0.0)

表44 日本文化を取り入れるか

	度数	パーセント
よくある	3	30.0
時々ある	7	70.0
あまりない	0	0.0
全くない	0	0.0

表45 日本文化を伝えることについて

	度数	パーセント
とても必要だと思う	2	20.0
多少必要だと思う	7	70.0
あまり必要ない	1	10.0
全く必要ない	0	0.0

表46 その理由

	度数	パーセント
ここが日系人学校だから	4	26.7
日本文化のよさがあるから	6	40.0
国際理解のため	4	26.7
自国の文化を知っていればよい	1	6.7
その他	0	0.0

表47 ブラジル文化を伝えることについて

	度数	パーセント
とても必要だと思う	2	20.0
多少必要だと思う	7	70.0
あまり必要ない	1	10.0
全く必要ない	0	0.0

表48 その理由

	度数	パーセント
家庭だけでは身につかないこともある	2	16.7
自国の文化を知ることは大切だから	3	25.0
あえて教える必要はない	0	0.0
自国の文化にとらわれないほうがよい	7	58.3
その他	0	0.0

では、保育における一般的な目的についてはどうだろう（表49）。幼児期の子どもにとって大切だと思われることについて「とても重要」から「全く重要でない」まで5つの尺度で聞いたところ、「とても重要」「まあ重要」として重視されていることとしては、「基本的なしつけをすること」（100%）、「文字や数の基礎を勉強すること」（80%）、「友だちとたくさん遊ぶこと」（100%）、「人の話を聞けるようになること」（100%）、「音楽や絵画などの芸術にふれること」（100%）、「規則正しい生活をする」（80%）、「自然とのふれあい」（88.9%）などが多く選択されていた⁵⁾。特に「文字や数の基礎を勉強すること」については、日本とは異なる傾向である。これは、ブラジルの幼稚園では幼稚園の目的の中でも就学前教育という色合いが濃いためであろう。

表49 幼児期の子どもにとって大切なこと

	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
	とても重要	まあ重要	どちらとも言えない	あまり重要でない	全く重要でない
基本的なしつけをする	8(80.0)	2(20.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
自由にのびのびさせる	4(40.0)	2(20.0)	4(40.0)	0(0.0)	0(0.0)
自分の意見を言える	3(30.0)	1(10.0)	6(60.0)	0(0.0)	0(0.0)
文字や数の基礎を勉強すること	3(30.0)	5(50.0)	2(20.0)	0(0.0)	0(0.0)
友だちとたくさん遊ぶ	7(70.0)	3(30.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
人の話を聞けるように	6(66.7)	3(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
自然とのふれあい	5(55.6)	3(33.3)	1(11.1)	0(0.0)	0(0.0)
好き嫌いしないで食べられるようになること	3(30.0)	4(40.0)	3(30.0)	0(0.0)	0(0.0)
音楽や絵画などの芸術にふれること	6(66.7)	3(33.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
規則正しい生活をする	4(40.0)	4(40.0)	2(20.0)	0(0.0)	0(0.0)

第2節 帰国児童の保育経験とその状況

教師たちのデカセギ帰国児童の保育経験はどうだろうか。保護者のデカセギに伴って、日本から帰国した児童を受け持ったことがあるかについては、「受け持ったことがある」と答えた者が7割を超え(70%)、「受け持ったことはないが関わった」(20%)を合わせると、ほとんどの教員が日本からの帰国児童に関わった経験を持っていた(表50)。これまでの受け持ち、あるいは関わった児童の人数は、「1～2名」3名、「3～4名」2名、「5～6名」2名とそれほど多いとは言えないが、中には10名前後や15名以上の関わりを持つ者もいる(表51)。また、児童の学年(年齢)を見ると、やはり「幼児クラス」が多い(66.7%) (表52)。だがその児童と関わったのは現在の園であるのは半数程度であり(55.6%)他はそれ以外の園での関わりであった(表53)。

表50 帰国児童の保育経験

	度数	パーセント
受け持ったことがある	7	70.0
受け持ちではないが関わった	2	20.0
そのような経験はない	1	10.0
合計	10	100.0

表51 関わった子どもの人数

	度数	パーセント
1～2名	3	33.3
3～4名	2	22.2
5～6名	2	22.2
7～8名	0	0.0
9～10名	1	11.1
11～12名	0	0.0
13～14名	0	0.0
15名以上	1	11.1

表52 帰国児童の学年(複数回答)

	度数	パーセント
幼児クラス	8	66.7
1学年～2学年	2	16.7
3学年～4学年	0	0.0
5学年～8学年	1	8.3
その他	1	8.3

表53 現在の園か

	度数	パーセント
現在の園である	5	55.6
現在の園ではない	4	44.4

では、帰国した児童に何か特徴はあるのだろうか（表54）。日本から帰国した子どもの特徴として考えられることを、「多かった」から「全くない」まで5つの尺度で聞いてみたところ、特に多く見られた項目はなかったが、「少ない」「全くない」という点に着目し解釈すると、「礼儀がしつけられていない子」は少なく（85.6%）、「ブラジル文化に馴染めない子」、「ポルトガル語が下手な子」も多いとは言えない（ともに71.3%）。つまり日本から帰国した子どもの特徴として、礼儀がしつけられていない、ブラジル文化に馴染めない、ポルトガル語が下手であるとは言えないということである。ただし、ポルトガル語が下手な子どもについては、「多い」「まあ多い」も見られる（42.6%）ことから、言語については様々なレベルであるのだといえよう。実際に子どもたちの使用言語を見ると、「日本語と少しのポルトガル語」と見ているものが55.6%と、ポルトガル語が上手くはないレベルの子どもが多い（表55）。

表54 日本から帰国した子どもの特徴

	多かった	まあ多かった	どちらとも 言えない	少なかった	全くない
ポルトガル語を話せない子が多い	1 (14.2)	0 (0.0)	2 (28.5)	2 (28.5)	2 (28.5)
ポルトガル語が下手な子が多い	2 (28.5)	1 (14.2)	0 (0.0)	3 (42.8)	2 (28.5)
学力が遅れている子が多い	1 (14.2)	1 (14.2)	2 (28.5)	0 (0.0)	3 (42.8)
ブラジル文化に馴染めない子が多い	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (28.5)	2 (28.5)	3 (42.8)
消極的な子が多い	0 (0.0)	2 (28.5)	1 (14.2)	2 (28.5)	2 (28.5)
礼儀がしつけられていない子が多い	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (14.2)	1 (14.2)	5 (71.4)
国際的な視野を持つ子が多い	0 (0.0)	1 (14.2)	4 (57.1)	1 (14.2)	1 (14.2)
特に何の心配もない	2 (28.5)	0 (0.0)	1 (14.2)	1 (14.2)	3 (42.8)

表55 帰国児童の使用言語

	度数	パーセント
ポルトガル語	1	11.1
ポルトガル語と少しの日本語	3	33.3
日本語と少しのポルトガル語	5	55.6
日本語	0	0.0
その他	0	0.0

そのため、子どもに言葉の面で配慮したという教師も多い（22.2%）（表56）。帰国した子どもに日本語を使うことが「よくある」と答えた者は多く（66.7%）、「あまりない」「全くない」と答えた者はいないことから、教師たちは、帰国した児童に対して日本語を交えながらの保育をしているといえる（表57）。特に「説明をするとき」（88.8%）、「ほめる時」（66.7%）、「注意を促すとき」（33.3%）、「なぐさめる時」（33.3%）などが多い（表58）。また、「学力が遅れている子どもが多い」「消極的な子が多い」も、多いから少ないまで分散している傾向であることから、これらも帰国児童だからという特徴とは言えないだろう。

では、子どもが日本で生活したことによる影響はどうであろうか。ブラジルと日本の文化の違いが見られる点として多く選択（多い・まあ多い）されているのは、「服装」（57.0%）、「食の好み」（50.0%）、「絵画や造形」（42.7%）、「自分の意見を述べる時」（42.8%）などである。逆に少ないのは「子ども同士のけんか」（85.6%）、「スポーツ」（71.3%）、「リズム遊びやお遊戯」（57.1%）、「自由遊び」（57.1%）などである（表59）。

このように帰国児童に対して、共通する特徴は確認出来なかったが、教師たちは保育の際に、日本語を使うなどの配慮をしている。以前園長へのインタビューの中でも、ここが日系の幼稚園であるため、ポルトガル語も日本語も使えることが、帰国児童にとっては最もよいと述べており、実際には言語以外の部分でも様々な配慮をしていると考えられる。

表56 帰国児童への配慮（複数回答）

	度数	パーセント
言葉の面で配慮した	4	22.2
ブラジルの文化について教えた	0	0.0
勉強の遅れを取り戻すよう配慮した	3	16.7
友達ができるよう配慮した	7	38.9
自信を持たせるよう心がけた	4	22.2
その他	0	0.0

表57 帰国した子どもに日本語を使うか

	度数	パーセント
よくある	6	66.7
時々ある	3	33.3
あまりない	0	0.0
まったくない	0	0.0

表58 どのような場面か（複数回答）

	度数	パーセント
ほめる時	6	66.7
注意を促す時	3	33.3
説明する時	8	88.8
なぐさめる時	3	33.3
その他	0	0.0

表59 文化の違い

	多かった	まあ多かった	どちらとも 言えない	少なかった	全くない
服装	2 (28.5)	2 (28.5)	2 (28.5)	0 (0.0)	1 (14.2)
食の好み	0 (0.0)	4 (50.0)	1 (12.5)	2 (25.0)	1 (12.5)
スポーツ	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (28.5)	4 (57.1)	1 (14.2)
絵画や造形	2 (28.5)	1 (14.2)	2 (28.5)	1 (14.2)	1 (14.2)
リズム遊びやお遊戯	1 (14.2)	0 (0.0)	2 (28.5)	4 (57.1)	0 (0.0)
自由遊び	1 (14.2)	0 (0.0)	2 (28.5)	4 (57.1)	0 (0.0)
子ども同士のけんか	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (14.2)	4 (57.1)	2 (28.5)
自分の意見を述べる時	0 (0.0)	3 (42.8)	1 (14.2)	3 (42.8)	0 (0.0)

第3節 デカセギに関する意識

教員自身のデカセギ経験を確認すると、「親戚が行ったことがある」（80.0%）、「友人が行ったことがある」（50.0%）、「知人が行ったことを聞いた」（70.0%）などが多く、「人からよく話を聞く程度」、「そのような話を聞いたことがない」と答えた者はいない（表60）。さらに保育を通してデカセギで帰国した児童に関わった経験を合わせて考えれば、日本へのデカセギは珍しいことではないことがわかる。

表60 周囲のデカセギ状況（複数回答）

	度数	パーセント
親戚が行ったことがある	8	80.0
友人が行ったことがある	5	50.0
知人が行ったことを聞いた	7	70.0
人からよく話を聞く程度	0	0.0
そのような話を聞いたことがない	0	0.0

それでは、教師たちは日系人の日本へのデカセギについてどのように考えているのだろうか（表61）。日本へのデカセギについての意識を見ると、「どんどん行くべき」と答えた者はさほど多くはなく（20.0%）、「仕方がない」と考えている者が最も多い（80.0%）。ただし、「あまり好ましくない」「行くべきでない」とした者はおらず、積極的とは言えないものの、条件付で肯定していると

見ることができる。

ではその条件とは何だろうか（表62）。多く選択されている項目を見ると、「日本の文化を知ることができるから」がまずある（60.0%）。他には「生活のためには仕方がない」（40.0%）が目立っており、多いとは言えないものの「日系人が祖国に行くのは当然だから」（20.0%）も見られることから、生活のためという理由はあるものの、祖国である日本の文化を知りたい、日本に行くのは日系人にとっては当たり前のことであるという意識が強いといえる。「ブラジル人はブラジルで仕事をすべき」、「（デカセギで）ブラジル社会に活気がなくなる」とは考えないようだ。だが、子どもの教育に関しては「子どもの教育に影響がある」ことを懸念する見方も存在していた（30.0%）。

子どもへの影響について詳しく聞いてみると（表63）、「ポルトガル語を覚えられない」が最も多く（80.0%）、「礼儀がしつけられない」（50.0%）、「遊びが日本的になる」（40.0%）、「食物の好み日本的になる」（30.0%）などが多く、彼らがこれまで帰国児童の保育で経験したことがその内容として示されていた。

表61 デカセギに対する考え

	度数	パーセント
どんどん行くべき	2	20.0
仕方がない	8	80.0
あまり好ましくない	0	0.0
行くべきでない	0	0.0

表62 その理由（複数回答）

	度数	パーセント
ブラジル経済が活性化するから	2	20.0
ブラジル社会が活性化するから	2	20.0
生活のためには仕方がない	4	40.0
日系人が祖国に行くのは当然だから	2	20.0
日本の文化を知ることができるから	6	60.0
ブラジル人はブラジルで仕事をすべき	0	0.0
子どもの教育に影響があるから	3	30.0
ブラジル経済が停滞するから	1	10.0
ブラジル社会に活気がなくなるから	0	0.0
特に理由はない	0	0.0
その他	1	10.0

表63 子どもへの影響1（複数回答）

	度数	パーセント
ポルトガル語を覚えられない	8	80.0
ブラジルの歴史を覚えられない	1	10.0
食物の好み日本的になる	3	30.0
遊びが日本的になる	4	40.0
礼儀がしつけられない	5	50.0
国際的な視野が広がる	2	20.0

また、家族でデカセギに行くことについては、「家族一緒ならよい経験だ」とする者がほとんどであり（88.9%）、「親だけが行くほうがよい」と答えた者はいなかった（表64）。教育への影響だけを考えれば、親だけが行くほうがよいと思われるが、それ以上に家族が一緒であることを重視しているようだ。

デカセギがブラジル経済に与える影響については、「多少よい影響を与えている」と答えたものと、「あまりよい影響は与えていない」がほぼ同程度であるが、「よい影響を全く与えていない」と答えたものも僅かに見られた（表65）。

表64 家族でデカセギに行くことについて

	度数	パーセント
家族一緒ならよい経験だ	8	88.9
親だけが行くほうがよい	0	0.0
どちらとも言えない	1	11.1

表65 ブラジル経済に与える影響

	度数	パーセント
よい影響を与えている	0	0.0
多少よい影響を与えている	5	50.0
よい影響はあまり与えていない	4	40.0
よい影響はまったく与えていない	1	10.0

最後にデカセギが子どもに与える影響について詳しく聞いてみよう。いくつかの選択肢を用意して、「そう思う」から「全く思わない」まで5つの尺度で尋ねてみた（表66）。

「そう思う」「だいたいそう思う」と答えたものを見ると、「家族が離れて暮らすよりはよい」（75.0%）、「日本は治安がよいので安心だ」（62.5%）、「日系人にとって日本を知るよい機会だ」（62.5%）、「日本語を身につけられてよい」（62.5%）などのプラスの面が多いが、一方で「ブラジルに帰国したときに難しいと思う」（75.0%）、「将来ブラジルでの就職に不利になる」（50.0%）と見ているものも見られる。

このように教師たちのデカセギ意識は、自らの保育経験を通して、子どもが帰国しても配慮しながら保育することで何とかできると考えているように思われる。そのため、日本に対する興味や期待の意識が目立っている。一方で帰国する子どもの年齢が上がることで、難しさが増すことも危惧しているため、よい面と悪い面が同程度選択された、いわば両義的な考えになっていると見ることが出来る。

表66 子どもへの影響 2

	度数 (有効%)	度数 (有効%)	度数 (有効%)	度数 (有効%)	度数 (有効%)
	そう思う	だいたい思 う	どちらとも 言えない	あまり思わ ない	全く思わな い
子どもの年齢が低ければ影響は少ない	1(12.5)	0(0.0)	4(50.0)	1(12.5)	2(25.0)
日系人にとって日本を知るよい機会だ	1(12.5)	4(50.0)	3(37.5)	0(0.0)	0(0.0)
日本語を身につけられてよい	2(25.0)	3(37.5)	2(25.0)	1(12.5)	0(0.0)
日本は治安がよいので子連れでも安心	4(50.0)	1(12.5)	1(12.5)	2(25.0)	0(0.0)
家族が離れて生活するよりはよい	6(75.0)	0(0.0)	2(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
将来ブラジルでの進学に不利になる	0(0.0)	2(28.6)	3(42.9)	1(14.3)	1(14.3)
将来ブラジルでの就職に不利になる	3(37.5)	1(12.5)	4(50.0)	0(0.0)	0(0.0)
ブラジルに帰国したときに難しいと思う	2(25.0)	4(50.0)	2(25.0)	0(0.0)	0(0.0)
子どものアイデンティティが確立しない	1(11.1)	2(22.2)	4(44.4)	2(22.2)	0(0.0)
母国の教育を心掛ければ問題はない	0(0.0)	2(40.0)	2(40.0)	1(20.0)	0(0.0)

おわりに

本園は、サンパウロ市の日系人街の通りに面している。そのため、周辺には日本人観光客や地元の日系人を対象にした商店、関係機関などがあり、サンパウロ市のなかでも日系人が多く集まる地区である。そのため、我々が調査で訪れた際も、街の一角でデカセギの仲介者と思われる人が、日

本へのデカセギ者募集のチラシを配っていた。

今回の調査結果を見ると、自らデカセギ経験を持つ保護者や、家族や親族にデカセギ経験を持つ保護者が多く、教師の側もこれまでにデカセギで帰国した児童を保育した経験を持っている場合がほとんどであった。この地区において日本へのデカセギは、いわば日常の一コマであるといえるだろう。

保護者たちは日本へのデカセギについて「生活のために仕方がない」と考えながら、他方では日系人にとって「日本の文化を知ることが出来る」いわばチャンスというプラスの意識を持っている。しかし子どもの教育のことを考えれば、日本へのデカセギが必ずしもよい結果をもたらすものではないとも感じており、そのようなアンビバレントな意識を持ちながら、それぞれがデカセギを選択している。

一方で教師たちは、これまでの帰国児童の保育経験から、大変だが配慮しながら保育することで何とかできていると考えている。そのため家族で日本へデカセギに行くことについても、「家族一緒なら…日本語を覚えられる、文化にふれられる」とプラスの見方をしていた。それは彼ら自身が日系人であり、日本への滞在や、来日を通して得られた経験に基づいているからだろう。さらに、このようなプラスの思考はここでの帰国児童に対する保育がスムーズに進んでいるからといえる。ブラジルという国にありながら、日本語で話し、日本の歌を歌い、折り紙で遊ぶことは、日本からの帰国児童にとっては、違和感がなく馴染んでいける。そこで少しずつブラジルの文化を身につけていけることは、帰国児童にとってある意味で理想的な環境と言えよう。

しかし帰国児童の問題を考えると、すべての児童が日系の幼稚園や学校に行ける訳ではないことを忘れてはならない。日系の幼稚園や学校は一般的な公立の学校と比較して費用が高いといわれている。帰国児童が公立の学校に入った場合、そこに日本語が使える教師がいることは少ないだろう。

また、日本との繋がりを考えれば、日本の保育施設に通園しているときに、どのような保育を受けているかによっても、違いがあるだろう。今後はこれらの点をふまえ、日本で行われている保育と、ブラジルにおける帰国児童の繋がりについて留意しながら検討することが必要であると感じた。

注

- 1) ここで言う日系幼稚園とは、現地の児童を対象とした、日系ブラジル人が経営する幼稚園のことであり、ブラジルに滞在する日本人の児童を対象とした幼稚園とは区別している。
- 2) 高学年児童の調査結果は少数であることから、今回の分析からははずしている。
- 3) 回答者の中で1名の非日系人が存在するのは、家族（配偶者）は日系人であるが、本人は非日系である場合があるからである。
- 4) 05年に行った園長へのインタビューによれば、日常保育に携わっている教育職員は半数程度が保育の担当であり、残りは音楽や日本語などの教師であるという。また教員は必ずしも教員資格を持った者ではない。なぜなら本園の採用基準は日系人であることと、保育者として適しているパーソナリティを持つかどうかを重視しているため、2世でそのような人材を確保するのは難しいという現実があるようだ。
- 5) この質問のうち、「人の話を聞けるようになること」「自然とのふれあい」「音楽や絵画などの

「芸術にふれること」の3項目は、未回答者が1名いたために、割合が異なっている。

参考文献

小内透編，2006，『調査と社会理論・研究報告書21 日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室。